労組大会シーズン

二つの労戦青写真

焦点を探る

切実な要求をどうたたかいに…

七月に入り、労働組合の大会シーズンを迎えています。十五日から開かれる総評大会を皮切りに、各単産の大会が相次いで開かれますが、焦点は春闘立て直し論や労働戦線統一問題、さらに労働運動の中期方針などです。とくに春闘では〝隔年春闘論〟や〝ブリッジ共闘〟などの論議が例年になく高まっているのが特徴ですが、来秋の新連合体への対応が焦点となっている労働問題についてスポットを当ててみました。

その焦点は、あと一年七カ月後に迫った全民労協の連合体移行をめぐる単産の対応です。

各組合の動向は「積極推進」の同盟系単産から、「全民労協を統一の母体にしない」とする総評系官公労、さらに「労戦の右翼再編反対・真の労戦統一」を掲げる統一労組懇系単産など三つ巴となっています。

こうした中で、ことしの大会ではとりわけ全民労協が今秋の総会で決める新連合組織の「全体の姿」と、総評の七月大会で決められる「労働戦線の全的統一構想」の〝二つの労戦青写真〟をめぐる論議が焦点となっています。

〝青写真〟の違いと類似

全民労協と総評がそれぞれ決めようとしている労戦青写真をみると、次のような特徴と相違点が浮き上がってきます。

まず全民労協の「連合組織全体の姿」は綱領などを盛り込んだ、「進路と役割」と運動方針骨子、規約、地方組織など七課題でつくられ、最大の特色は、民間だけのナショナルセンターを先行して結成させる青写真となっていることです。

さらに総評などが問題としている国際自由労連への一括加盟や統一労組懇の名ざし批判にみられる選別的表現を残し、「基本構想の理念の堅持」などを明記したものとなっています。

一方、総評の青写真となる「労働戦線の全的統一の実現をめざして」（素案）では、「経過」「全的統一の必要性」「統一ナショナルセンターの姿」「プロセス」の四項目からなり、最大の特色は、全民労協の民間先行に対し、官民、大手と中小、地域を一体としたナショナルセンターをめざしていることです。

また統一の時期についても全民労協の「八七年連合体移行、八九年全体の統一」に対し、総評案は九〇年前後の統一ナショナルセンター結成を展望。そのプロセスでも民間先行―官民ブリッジを構想する全民労協に対し、総評は、労働四団体と全民労協連合体の〝労働五団体〟と官公労代表による「全的統一準備会」（仮称）を提唱、さらに官公労統一についても、総評系官公労と同盟系全官公などによる「官公労連絡懇談会」（仮称）の設置をよびかけています。

さらに運動課題では、行革、原発、食料政策などで全民労協と総評との違いがあり、会費も全民労協の三十円に対し、総評は二十円説です。

しかし、この総評案は経過で「連合組織への移行自体は承認する」として、全民労協の連合体化をベースとした方針。しかも統一ナショナルセンター発足（総評解体）の時期も「九〇年前後」と初めて明記し、昨年の総評大会より一方踏み込んだものになっています。

加盟採決は来年へ

この二つの青写真に対する労働団体や単産の方針案をみると、同盟がいち早く連合体青写真への「支持」を表明したほか、中立労連の議長組合である電気労連なども七月の定期大会で「支持」を決める方向です。

一方、総評は、連合青写真の支持派である鉄鋼、全電通と〝問題提起派〟の官公労、反対派の統一労組懇系単産と、三極構造となっています。

さらに総評の全的統一構想案についても、全民労協の青写真と対比して、日教組などが問題点を提起しています。

そのポイントは、①全民労協の「進路と役割」には選別結集や国際自由労連の一括加盟、「基本構想」の堅持があり、全的統一の障害となるために反対であり、全民労協を母体とする労戦統一には賛成できない、②財政、運動領域、地方組織は連合体移行前に解決すべきだ、③行革、教育、原発などで容易に一致点は見い出せず、むしろ減税、時短、賃上げなどの共同行動を――と問題点も指摘しています。

新連合組織に加盟するかどうかの採決は合化を除き私鉄、電機などほとんどの単産が来年回し。今大会では青写真論争となりそうです。〔連合〕

〈七つのまちがいさがし（四面）のこたえ〉
地球の口、沖縄、トマホーク、右上の星、鳩の足、原子記号、とばされた男の鼻

三池炭鉱の暮らし

従順、一貫教育

第十二回

武松輝男

納屋に、保育所がはじめて造られたのは七十三年前の大正二年九月であった。万田坑夫納屋保育所である。五十九坪の広さをもった建物で、保育室が三十一坪、睡眠室十二坪から成り立っていた。それと湯殿も備わっていた。

この万田保育所は、もっと早くから造られていたようである。建坪は三十坪ぐらいとまでは判っているが、建築年がもうひとつはっきりしないから、大正二年九月をいちおうの保育所建築年度にしているのである。

遊戯施設には辷り台、ブランコそれに廻り台（回転台のこと）があった。

この万田保育所では他の保育所と異なった設備をもっていた。それは冷蔵庫である。冷蔵庫といってもかって各所で使われていた氷冷蔵庫ではなくて、煉瓦造りの地下冷蔵庫である。いま流行りの地下収納庫のことであるが、六段の階段がついていて、縦三間、横三間の立派なものであった。当時としては画期的な設備であったであろう。

大正七年には宮浦坑保育所が造られる。この宮浦保育所には万田保育所と違った遊具が造られる。それはバスケット台で、それと麦藁藁張りの日覆棚もあった。

大正八年には横須長屋、十三年には四山坑夫社宅保育所、十五年に宮原社宅保育所が造られている。

もちろん、これらの保育所は、三池炭鉱を三井が取得したあと、納屋の一室とか、納屋事務所の一隅とかを利用しながら保育していた施設を拡充したものである。

昭和に入ると、従業員の増加に伴ってさらに増改築を含めて拡充補強されている。年度順にみてみると、万田、勝立、臼井、小浜、新港、宮内、緑ケ丘、四山、原万田、七夕保育所などである。

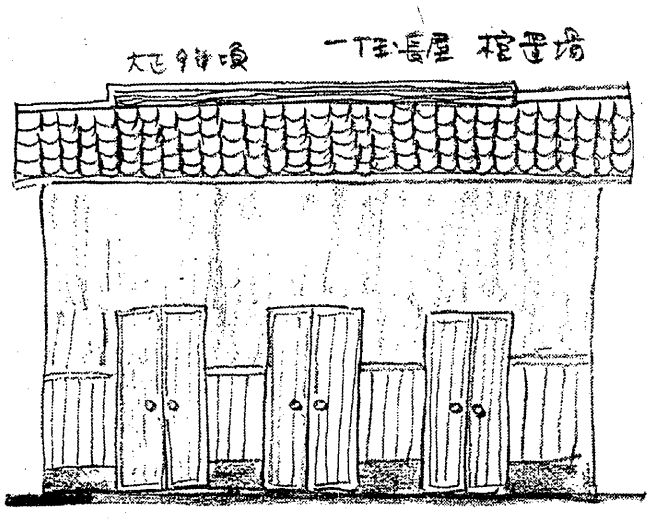
坑夫子弟のために造られたもうひとつの施設に、三池炭鉱私立小学校がある。

最初は寺小屋式の、納屋の一室を使ったもので、三井が三池炭鉱を取得した十二年あとの明治三十一年がはしりのようである。二時間授業であったという。そのあと一教室の納屋学校ができたのが三十五年、四十年には、それまで二時間の授業であったのが三時間になっている。学校という形式をとるのはそのあとで、明治四十二年からであった。

この学校も保育所と同じように年度別に並べてみると、大浦、宮浦、勝立、一丁玉、三坑、亀谷、万田（女子に裁縫科を設ける）、七浦（一丁玉、三坑を吸収）、三川（与論島民用）である。このあと三池炭鉱従業員婦女子のための女学園が設けられている。設立は昭和十四年頃であるが、修身と裁縫を教えているが、当時、教師をしていた老婦人の話によると、炭鉱視察者への湯茶接待も、女学園の科目のひとつであったという。

このほか、納屋内に裁縫室をもっていたところもあった。女学園のような系統的な教育方針によらないで、サークルとか部活動とかいったものであった。その活動が最も盛んであったのが、与論島民長屋であったと、古老たちは語っている。

三池炭鉱の納屋子弟の企業寄り教育が、ある筋道を立てて、どういうふうにされていたか、おおよそ見当がつく。これでは企業に逆らうなどということがほとんどできないだろうと思える。三池労組が、戦後〝眠れる豚〟などと言われていた。その根源のひとつは、実はこのような、幼児から始められている企業教育の所以であったろう。この頂点に私立三井工業学校があった。



中国駆け歩き ⑤

友誼商店、買い物

杉本一男

私たち代表団が現金を支払うことはほとんどない。数少ない経験は友誼商店などでの買い物だけである。

友誼商店というのは外国人用のお土産店。中国には二つの通貨があって、同じ元でも人民幣と外貨券（兌換券）に分かれ、外国人は原則として外貨券でしか買い物はできない。

北京や上海などの友誼商店は高級デパートという趣きであり、なんでも揃う。ホテルにも整った売店があり、外貨は友誼商店、ホテルに中国銀行の出張所があって容易に両替えができる。

年間四十万人とも五十万人ともいわれる外国旅行者を受け入れている中国だが、とくに観光には力を入れており、主要都市や観光地ではホテルの建設ラッシュだという。このうち、およそ半分は日本人で、デラックスバスの観光団を見ると、わが同胞のように思えた。

観光とショッピングを兼ねてであろうが、当時為替レートは円が百七十円台で毎日のように徐々に上がっていた。その分安く買えるわけである。

もっとも、私たちはあまり余分の金は持ち合わせていなかったが、とにかく品物が安い。

例えば、高級自転車が百元ぐらいだから、一元がほぼ六十円として六千円。一万円もあれば一カ月生活できるわけである。

病気をすれば本人は無料で、家族は半額、給料は半年間保障され、その後は八割となる。住宅も無料に近いようなもので、学校も同様。能力さえあれば進学できるが、最高学府、有名校への試験はかなり厳しいという。

共稼ぎが多いから、カラーテレビ、洗濯機などが人気の的だが生産が追いつかない。インフレの傾向がないわけではない。

ぜいたくさえしなければ生活はしやすいし、あくせくしないのがいい。それでいて人工衛星を輸出する国なのである。

北京友誼商店の人口。タクシー（汽車という）は日本製のクラウン、セドリックなどが多い。それでいて2元～3元と安い。